

日本学術振興会研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）  
中間評価（平成29（2017）年度採択課題）書面評価結果

日本側拠点機関名 千葉大学（教授・羽石 秀昭）  
研究交流課題名 マルチモーダル計測医工学の国際拠点形成

評価結果（総合的評価）

- |                                  |  |
|----------------------------------|--|
| <input type="radio"/>            | A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。                    |
| <input checked="" type="radio"/> | B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。       |
| <input type="radio"/>            | C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。                |
| <input type="radio"/>            | D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。 |

所見

本課題は、前半2年間において、世界的水準の研究交流拠点の構築が順調に進展し、各領域内での共同研究も成果を生みつつある。また、研究課題、連携機関の予定外の増加もあり、研究交流の広がりという観点では、想定以上の成果を生んでいる。学術論文件数および国際学会発表（受賞含）件数も十分に評価できるものである。一方、「マルチモーダル」は、異なる方法論の有機的結合により加算ではなく相乗のシナジー効果を意図するものとする。その観点からは、世界的水準の研究交流拠点構築の目標達成は、まだ未知数と言わざるを得ない。

若手研究者育成への貢献においては、若手研究者による研究者間のセミナーやワークショップの開催や海外共同学習プログラムの開催およびダブルディグリープログラムなどの活動に加え、学生の相手国拠点への就職（4名）などの実績面においても、若手研究者が相手国拠点との研究ネットワークを構築するという交流事業の観点から一定の成果を上げていると評価できる。

今後の研究交流活動計画について、令和元年から令和3年までの3年間で計130名規模の研究員の海外派遣を計画しており、今後の研究交流活動の活発化に更なる期待ができる。同時に、研究交流の深化、特に相乗効果を生む領域間の連携研究の推進が重要となると考える。領域間連携研究を推進する具体的方策を十分検討願いたい。また、相手国拠点が研究交流に費やす資金の総額を増やす方策が必要である。波及効果の1つとして挙げられている標準化活動は、産業的なニーズが高く多くの国に参加を求めることができるため、相手国拠点の費用支出拡大の方策の一つとして評価できる。